

サレジオ会の 歴代総長たち

Don Bosco & His Successors

ドン・ボスコとその後継者



1
初代・創立者
ジョヴァンニ・ボスコ

Giovanni Bosco

〔1815～1888／在任期間：1859～1888〕
若者たちのための教育と魂の救いのために生涯をささげ、サレジオ会を創立。



4
フィリッポ・リナルディ

Filippo Rinaldi

〔1856～1931／在任期間：1922～1931〕
初代スペイン管区長。サレジオ家族を発展させ、チマッティ神父を日本に派遣。



7
ルイジ・リッチェリ

Luigi Recceri

〔1901～1989／在任期間：1965～1977〕
第2バチカン公会議による変革にあわせ、サレジオ会会憲を改訂。



10
パスクアル・チャーベス

Pascual Chávez

〔1947～／在任期間：2002～2014〕
第2バチカン公会議40周年やドン・ボスコ生誕200周年などに向けて、教会とサレジオ家族の原点を見つめ、新たな使命に導いた。



2
ミケーレ・ルア

Michele Rua

〔1837～1910／在任期間：1888～1910〕
ドン・ボスコの教え子として精神を忠実に伝え、会の基盤作りと海外宣教に尽力。



3
パオロ・アルベラ

Paolo Albera

〔1844～1921／在任期間：1910～1921〕
サレジオ会の霊性を深め、同窓生や協力者と協働するよう精神を広めた。



6
レナート・ジジョッティ

Renato Zaggiotti

〔1892～1983／在任期間：1952～1965〕
戦後の混乱期に世界中を視察、会全体の連帯感を高め活気づけた。チマッティ神父の教え子。



9
ファン・ベッキ

Juan Vecchi

〔1931～2002／在任期間：1996～2002〕
対話と発信により、青少年司牧の刷新と活性化に尽力した。



8
エジディオ・ヴィガノ

Egidio Viganò

〔1920～1995／在任期間：1977～1995〕
教皇とバチカンのために貢献し、第三世界の問題にも取り組んだ。



11
アンヘル・フェルナンデス・アルティメ

Ángel Fernández Artime

〔1960～／在任期間：2014～2024〕
「若者、特に貧しい若者に対する神の愛の大胆なしるし・担い手」となることをサレジオ会員に求めた。2023年にフランシスコ前教皇によって枢機卿に任命された。



12
現総長
ファビオ・アッタールド

Fabio Attard

〔1959～／在任期間：2025～〕
マルタ・ゴゾ島出身。長年、青少年司牧や教会の教育活動に尽力し、2018年に「いのち・信徒・家庭省」顧問に任命される。2025年3月のサレジオ会第29回総会で新総長に選出。

ドン・ボスコの風 アヴァンティ 総長来日特別号 2026年10月4日発行

編集人 岡本 大二郎
発行人 濱崎 敦
発行所 サレジオ会日本管区本部
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話：03-3351-7041 Fax：03-3341-5429
Eメール：dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 株式会社プリントパック

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© サレジオ会日本管区本部 2026

「ドン・ボスコの風」について

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した「Bollettino Salesiano」の日本版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

note版「ドン・ボスコの風」https://note.com/db_no_kaze

サレジオ会日本管区が管理人を務めるサレジオ家族のウェブ版オラトリオ（学び舎）です。若者と、共に歩むすべての人が、学び・つながる場として、皆さんと一緒に作っていく発信スペースです。サレジオ家族の様々な人や場所、事柄を随時紹介しています。



Salesian Bulletin Japan

ドン・ボスコの風



Avanti
アヴァンティ

目次

総長メッセージ p2

「サレジオ会来日100周年に際して（1926-2026）」

ファビオ・アッタールド神父へのインタビュー p3

「専門的な有能さは、修道者としてのアイデンティティに根ざしていなければならない」

アッタールド総長のことば p4

サレジオ会来日100周年祝祭期間の記録 p6

サレジオ会の歴代総長たち p8

サレジオ会総長

ファビオ・アッタールド神父 来日特別号

総長訪日期間：2026年10月1日～8日
【大阪・調布・小平・横浜・宮崎】



サレジオ会来日100周年

記念期間：2025年2月8日～2026年10月4日

総長メッセージ

サレジオ会 来日100周年に際して (1926-2026)



管区長様、会員の皆様、サレジオ家族の皆様、
青少年の皆様、友人・協力者の皆様へ

主に深い感謝を捧げつつ、私はこの敬愛すべき国、日本におけるサレジオ会宣教100周年を、日本のサレジオ家族の皆様とともにお祝いいたします。この記念は、100年の歴史を振り返るということにとどまりません。それは何よりも、サレジオ会の宣教活動をその始まりから導き、力づけ、支えてくださった神の変わらぬ現存を、喜びをもって祝うことなのです。

ヴィンチェンツォ・チマッティ神父をはじめとする最初のサレジオ会宣教師たちは、1926年来日しました。彼らは、信仰と希望、そしてドン・ボスコの若者への熱い愛を携えていました。深い文化と精神性を持つこの地に、謙遜と敬意、そしてこの国の人々を知り、仕えたいという真摯な願いをもって足を踏み入れたのです。教育、福音宣教、友情、そして喜びに満ちた福音の証しを通して、彼らは種を蒔き、その種は神の恵みによって、この100年の間に豊かな実を結びました。

今日私たちは、「日本のドン・ボスコ」と呼ぶにふさわしい尊者ヴィンチェンツォ・チマッティ神父の、並外れた信仰と勇気、そして宣教への情熱を、深い感謝とともに思い起こします。彼は40年にわたり、全身全霊を日本の人々に捧げ、サレジオ会の宣教が今なお発展し続けるための、霊的・教育的な礎を築きました。彼が大切にしたいモットー「つねに主とともに、主のために、主のうちに」は、福者フィリッポ・リナルディ神父が最初の宣教師たちに与えた助言、すなわち「Jesus et hunc crucifixum（イエス、しかも十字架につけられたイエス）」——十字架のイエスをその宣教の中心に据えるようにという言葉、見事に映し出しています。これら先駆者である宣教師たちと、彼らに続いたすべての人々に敬意を表しつつ、私たちはその忠実さ、寛大さ、そして犠牲の精神に感謝を捧げます。同時に私たちは、新たにされた希望と確信をもって、未来にも目を向けます。今日の日本の若者たちは、目覚ましい技術の発展に恵まれた社会に生きていますが、その一方で、多くの若者が

意味やアイデンティティ、所属、そして不確実性という深い問いと向き合っています。孤独や、ますます複雑化する世界の重圧は、彼らの日常の一部となっています。このような状況の中で、サレジオ会のカリスマは、これまで以上に意義深く、必要とされるものとなっています。ドン・ボスコは、すべての若者が耳を傾けられ、寄り添われ、教育され、人生の美しさと福音の喜びを発見するよう励まされるような、心温かい共同体を私たちが築くことで、神の愛の真の印であり、担い手となるようにと、今も私たちを鼓舞し続けているのです。

私たちに託された使命は、単に貴重な遺産を守ることではなく、聖霊がそれを絶えず新たにしてくださるまに委ねることです。あらゆる世代は、ドン・ボスコの夢の新鮮さを再発見し、変化していく若者たちのニーズに、創造的かつ勇気をもって応えるよう招かれています。

この歴史的な節目を祝うにあたり、私は日本のサレジオ家族のすべてのメンバーに、宣教への熱意を新たにされるよう、心から呼びかけます。ともに歩みの交わりを続け、協働者の皆様との協力をさらに強め、とりわけ貧しく、弱い立場にあり、希望を求めている若者たちを、あらゆる教育的・司牧的な取り組みの中心に据えてください。

サレジオ会の宣教を常に導き、守ってこられた扶助者聖母マリアが、これからも母としての心遣いをもって、日本管区に寄り添ってくださいますように。その力強い取り次ぎによって、来るべき100年が、新しい召命、新たにされた宣教への熱意、そしてドン・ボスコの子ら——サレジオ会員とサレジオ家族——の愛情深い現存と喜びに満ちた証しを通してキリストを知り出会う数多くの若者たちによって、祝福されますように。ドン・ボスコの夢が、日本の心の中で、いつまでも新たに花開きますように。

心からの願いと祝福を込めて、

ファビオ・アッタールド神父 SDB
総長

ファビオ・アッタールド神父へのインタビュー：

専門的な有能さは、 修道者としてのアイデンティティに 根ざしていなければならない

(Salesian Bulletin Onlineより)



サレジオ会の総長であるファビオ・アッタールド神父にインタビューを行い、彼の召命の節目、そして人間的・霊的な歩みを振り返っていただきました。彼の召命は「オラトリオ」から始まり、アイルランド、チュニジア、マルタ、そしてローマへと至る豊かな養成の歩みの中で確固たるものとなりました。2008年から2020年までは「青少年司牧総顧問」を務め、様々な文脈での経験を通じて培われた、マルチカルチャー（多文化）な視野をもってその役割を果たされました。彼が伝える中心的なメッセージは、サレジオ会の教育活動の基盤としての「聖性」です。「私は、もっと聖なる修道会であってほしいと願っています」と語るアッタールド神父は、専門的な仕事の有能さは、誓願を立てた修道者としてのアイデンティティに根ざしていなければならないと強調します。

●あなたの召命のストーリーを教えてください。

私は1959年3月23日、マルタのゴゾ島で、7人きょうだいの5番目として生まれました。私が生まれた当時、父は病院の薬剤師で、母は小さな生地と仕立ての店を始めていました。その店はやがて5つの店舗を持つまでに成長しました。母は大変な働き者でしたが、ビジネスは常に家族経営のままでした。

地元の小学校と中学校に通いました。私の子供時代のとて美しく特別な思い出は、父がオラトリオの信徒カテキスタ（信仰教育者）だったことです。そのオラトリオは1965年までサレジオ会が運営していました。父は若い頃にそのオラトリオに通い、サレジオ会が去った後も、唯一の信徒カテキスタとしてそこに残り続けたのです。私が6歳で通い始めた時、サレジオ会はちょうど去ったばかりでした。しかし、一人の若い神父（今も健在です）が引き継ぎ、自身も神学生としてそこで過ごした経験から、まったく同じ「サレジオ的精神」をもってオラトリオの活動を継続してくれました。

私たちは、カテケーシス（信仰教育）、毎日の聖体賛美式、サッカー、演劇、聖歌隊、遠足、パーティーなど、オラトリオで通常体験することをすべて続けました。多くの子供

や若者がいて、私はその環境の中で育ちました。実質的に、私の生活は家族とオラトリオの間で成り立っていたのです。また、小教区（教会）では侍者もしていました。そのため、高校を卒業した後は自然と司祭への道を志すようになりました。子供の頃から心の中にその望みがあったからです。今日振り返ると、私がどれほどあの若い神父様の影響を受けていたかが分かります。私は彼を憧れの眼差しで見えていました。オラトリオの活動中、彼はいつも中庭で私たちと共にいてくれました。そこで私は地元の教区神学校に入り、寄宿生として2年間の準備期間を過ごしました。3年目に教区神学生として哲学を学び始めた頃、家族ぐるみで付き合いのあった友人に会いました。その人は35歳くらいでサレジオ会志願生となり、今もサレジオ会修道士として元気に活躍しています。彼がサレジオ会員への最初の歩みを踏み出した時、私の心の中に火が灯りました。霊的指導司祭の助けを借りて、召命の見極めを始めました。それは真剣で、同時に過酷な歩みでもありました。私は19歳でしたが、その霊的指導司祭は、私自身の意志ではなく、ただ「神のみ旨」を追い求めるよう手助けしてくれました。識別の結果、哲学の第2学年を終える時に、私は教区神学生として神学の勉強を続けるのをやめて、サレジオ会の志願者として生活を始めることにしました。

私の家族の環境は、信仰に強く特徴づけられていました。私たちは毎日ミサに預かり、家ではロザリオを祈り、とても固く結ばれていました。今日、両親はすでに天国に召されましたが、私たちきょうだいは今でも同じ絆を保っています。

→続きはnote版にて
下記QRコードよりアクセスできます

note版 全文バージョン
https://note.com/db_no_kaze/n/n02bebd1c629?sub_rt=share_pw



アッタールド総長のことば

Words of the Rector Major

世界中のサレジオ家族、特に若者たちに贈る
アッタールド総長のいつくしみに
あふれることばを紹介します。

皆さんの個人的な経験を、
(神様からの) 賜物として見直してください。
朝起きて、鏡に写った自分の姿に
『調子はどうだい?』と聞き、
ちょっと微笑むなら、その人は健全な人です。

(総長就任直後、ヴァルドッコで青年たちにしたお話の一部)



何が起こるかは主にかかっています。
あなたはただ準備を整え、
いつでも対応できるようにしておけばいいのです。
そうすれば、主がどのように働かれるか、
あなたは目にすることになるでしょう。

(2025年4月30日 「Bollettino Salesiano Online」より)

ファビオ神父様が総長に選ばれたときに出したコメントの一部。神様に身を任せることの大切さを感じますね。



私たちも派遣されています。
私たちの仕事場、近所、家庭、友情は、
キリストが行こうとされている『町、場所』です。
道を備えるために、ご自分に先駆けて
私たちをそこに遣わされるのです。

(2026年6月「Bollettino Salesiano」 総長の言葉より)



今日、私たちの子供や若者が、
健全で成熟した、忍耐強く、先見の明のある大人、
親、教育者を見つけることが
どれほど緊急なことでしょうか。

(2025年5月31日 「Bollettino Salesiano Online」より)

ヨハネ福音書の最後の部分の解説での一文。ペトロにイエスが3度同じ質問を投げかけたことを解説し、ペトロの裏切りにも関わらず、ペトロを愛し、『私の羊を牧せよ』と使命を託すイエスの姿に、未熟な青少年を導く大人も倣う必要を訴えています。

教えを通じて私たちが発見するこのイエスは、
もっと先に行くよう私たちを促します。
イエスの自己贈与の模範に分け入り、
それを自らのものとするようにと。
十字架に至るまで自らを捧げたご自身を
模範として差し出しながら、
偽りのイメージを捨て、
あらゆる種類の依存の罠を避けるよう
私たちに求めます。

(2026年4月「Bollettino Salesiano」 総長の言葉より)



私たちも時として、気づかいうちに
フィリポ症候群やアンデレ症候群に
陥ってしまうことがあるということをお伝えしたいのです。

(2025年6月30日 「Bollettino Salesiano Online」より)

イエスによるパンの増加の奇跡の物語の中で、フィリポが理屈を盾に責任を困窮者に押し付けたり、アンデレが不可能であることを前提に提供されたパンや魚を無意味なものにしようとしたことを、わたしたちの中にもある「症候群」と表現しています。



サレジオ会来日100周年祝祭期間の記録

2025年2月8日（土）

来日100周年オープニング／ 堤峻作神学生終生誓願式

調布カトリック教会において、オープニング・ミサおよび堤峻作神学生の終生誓願式が行われました。式中、この祝祭の期間をともに歩んでくださることを表すために、チマッティ師の靴と若者の代表の靴を奉納いたしました。また、堤神学生が自らを生涯にわたって捧げる誓いを立てるうれしい式も行われ、記念すべき幕開けとなりました。そのうち、ドン・ボスコホールにおいて、若者たちの司会で開幕のセレモニーが行われ、チマッティ神父のオペレッタの楽曲や青年たちのパフォーマンスなどが披露されました。



2025年9月7日～13日

サレジオ家族3修道会合同黙想会 （ドン・ボスコ後のサレジオ教育の変遷と現代化）

ローマのサレジオ大学よりミハウ・ヴォイタス神父を迎え、サレジオ会、サレジアン・シスターズ、イエスのカリタス会の3修道会合同の黙想会が山中湖のFMA黙想の家で行われました。教育学を専門とされているヴォイタス神父様は、ドン・ボスコ以降のサレジオ教育の歴史と今後のあり方を、ご自身の研究に照らし合わせながらわかりやすく語ってくださいました。参加者にとっては霊的にも大きな刺激となりました。



2025年5月24日（土）

アプト神学生助祭叙階

ケニアから日本への宣教師として派遣されているジョゼフ・アマディ・アプト神学生が、フィリピンでの神学の勉強を一通り終え、日本で助祭に叙階される恵みを受けました。叙階式はマリオ山野内倫昭司教により司式され、ケニアからお母様と管区長らが駆けつけ、その喜びのひとときをともにすることが出来ました。来日100周年という記念すべきときに宣教師という召命の実りを見ることが出来るのは大きな恵みです。



2025年10月11日（土）

チマッティ・デー／ 福音宣教の日

来日当時のサレジオ会の歩みを知るために、御年95歳となるコンプリ神父より、チマッティ神父の喜びや苦労を、お年を感じさせないパワフルなお声と軽妙さをもって語っていただきました。若者参加者によるDBVG（ドン・ボスコ・ボランティア・グループ）の活動の発表もあり、チマッティ神父様の夢が現代の若者の中で実を結んでいる姿を見ることができました。なお、来日100周年に合わせ、全国各地でコンサート「チマッティ師のメロディー」が開催されています。



2025年11月23～24日

中高生の集い

（希望をつむぐ、サレジオの次の100年～
カルロ・アクティスに学ぶ～）

今年もサレジオ家族の7つの学校から30名を超える中高生の生徒たちが集まり、レクリエーションを楽しんだり、聖人の模範を学んだり、寝食をともにしながら交流を深めました。参加者からのパフォーマンスの発表もあり、実に楽しい2日間を過ごすことが出来ました。100年の宣教の成果の一端をここでも感じる事が出来ました。



2026年3月21日（土）

深川神学生助祭叙階

アプト助祭に引き続き、来日100周年祝祭期間中にもう1人助祭が誕生しました。小田原教会出身の深川信一助祭です。横浜教区長ラファエル梅村昌弘司教様の司式により執り行われた叙階式には、深川助祭が関係する多くの若者たちも参列し、神様から送られた力強い希望を示してくれました。



2026年2月8日（日）

サレジオ会来日100周年記念ミサ （東京カテドラル）

チマッティ神父に率いられたサレジオ会の最初の宣教師団が門司港に到着してから100年目のこの日、東京カテドラル聖マリア大聖堂にはおよそ1000人のサレジオ家族や関係教会の信徒、同窓生などが集まり、タルチシオ菊地功枢機卿様の主式のもと、記念ミサが執り行われました。若者たちのパフォーマンスやスピーチは参加者の心を捉え、サレジオ会のこれからの歩みに希望を与えるものとなりました。



2026年6月24日（水）

土橋直生さん初誓願式

フィリピンではこの日、一年間の修練準備期および一年間の修練期を終えて、土橋直生さんが初誓願を宣立する恵みをいただきました。日本とは異なる言葉や文化の中で仲間たちと過ごして得た多くの経験を、これからはサレジオ会員の仲間として存分に活かしていってほしいと思います。これも来日100周年の大きな恵みです。

